

色彩の心理 (六)

菅原 教造

三十 單獨對比と復合對比

上來二十六章から三十章に亘つて、第一表に示した分類に徒つて、光の對比と色の對比の種類を別々に述べて來た。即ち對比の種類は第一表によれば、1 2 3 4 5 6 7の七種に分けて見る事が出来る。

右の七種の對比の中、1より6までの六種は、それ／＼對比が單獨に現はれて來る。故にこれを單獨對比と稱する事が出来る。然るに7は前章に述べたやうに、異調色の明度對比を呈すると共に、色の調子の對比や、飽和を増す對比も同時に現はれて來る。これを第一表の式にして示せば、 $\frac{1}{2}$ は實は $\frac{1}{10}$ 又は $\frac{1}{100}$ とならなければならぬ。故にこの7を單獨對比に對して復合對比と稱する事が出来る。

斯の如く、第一表によつて單獨對比と復合對比とを區別する端緒を得る事が出來た。併し第一表は此の區別の細説を畫すに足りないから、此の章に於て更に此の問題を説いて見やう。乃ち第一表に準據して次の第五表を作つて見る。

| 第五表 | |
|----------------|----|
| 〔一〕光と光との對比 | 1 |
| 〔二〕光と色との對比 | 2 |
| 前景が色・背景が鼠 | 3 |
| 背景が色・前景が鼠 | 4 |
| 前景の色と同明度の鼠 | 5 |
| 前景の色より明るい又は暗い鼠 | 6 |
| 前景の色は明度の對比を受く | 7 |
| 背景の色と同明度の鼠 | 8 |
| 背景の色より明るい又は暗い鼠 | 9 |
| 背景の色は明度の對比を受く | 10 |
| 背景の色より明るい又は暗い鼠 | 11 |
| 色の感得 | 12 |
| 色の感得と明度の對比の結合 | 13 |

第五表

| | | | |
|------------------------------|------------------------|-------|---|
| 同調色の明度對比のみの場合…………… | (例)淡青と濃青…………… | 2 | 1 |
| 色の調子の對比のみの場合…………… | (例)赤と緑、樺と鶯(互に同明度)…………… | 4 | 3 |
| 色の飽和を増す對比のみの場合…………… | (例)赤と淺黄(互に同明度)…………… | 5 | 4 |
| 色の飽和を減する對比のみの場合…………… | (例)青と鼠青(互に同明度)…………… | 6 | 5 |
| 色の調子の對比と異調色の明度對比の結合…………… | (例)緑と青…………… | 4 + 7 | 1 |
| 色の飽和を増す對比と異調色の明度對比との結合…………… | (例)黄と青…………… | 5 + 7 | 1 |
| 色の飽和を減する對比と同調色の明度對比との結合…………… | (例)青と淡青、青と濃青…………… | 5 + 3 | 1 |

右の第五表のアルファベットの中、 b は對比の現はれない場合、 $a d f g h i$ は單獨對比の場合、下線を施した $e j$ は復合對比の場合である。(この復合對比の中の $j k$ は既に前章と此の章の初めに説いたものである。)

次に第五表の中の b と e とは繪畫や圖案や工藝品の取扱の上に應用される事を知らなければならぬ。 b は前景の色と明度の鼠を背景とする事で、此の場合に於ては前景の色は何等の對比の影響を蒙らない。故に圖案の臺紙、色布の包み紙繪の額縁等として、此の同明度の鼠がよく用ゐられる。又 e は圓筒で色を覗いて見る場合で、二十八章で述べたやうにゴブラン會社のシユヱリユールが用ゐた方法などに現はれる。圓筒の内側は暗いから、一般に覗いた色は實際よりも多少明るく見える筈である。

三つ以上の復合對比は、右の第五表から推して知る事が出来る。

三十一 同時對比と繼續對比 單像對比と二重像對比

緣對比と面對比

對比を分類するのに二つの観方がある事は、既に第二十六章の初めに述べた。即ち第一は對比の現象に於ける光や色の性質から分類するもの、第二は對比を生ぜしめる方法からの區別である。此の第一の分類に就ては、第二十六章から第三章にかけてかなり精しく其一般を述べた。此の章に於ては第二の分類法に就いて、極めて概略を説いて見やう。

(一)對比の現象が、同時に現はれると繼續して現はれるとに依つて、之を同時對比と繼續對比とに分ける。(1)同時對比は即ち本來の對比で、悉くこれまでに記述したものである。即ち對比を與へる光や色と、對比を受ける光や色とが、同時に現はれて對比の現象を起すものである。(2)繼續對比と云ふのは、甲の色紙の上に乙の色の消極的殘像を投出して、此の二色が混じた場合を云ふので、既に第十九章『所謂消極的殘像』の終りの節「原像と消極的殘像とで混色を實驗する事が出来る」と云ふ部分で述べた通りの現象である。

(二)對比の現象が單像として現はれる時と、二重像として現はれる時とに依つて、之を單像對比と二重像對比とに分ける(1)單像對比は今までの例のやうに、左右の眼が單一の光や色の像を見る場合である。(2)二重像對比とは同一の刺激(黒地に白の紙)を、兩眼に依つて二重像として見た場合に生ずる對比である。此の現象の本來の名は、側窓實驗と稱へられる。吾々が窓に斜に面して立つて、窓から來る光が一方の眼にのみ入り、他の眼に入らぬやうにする。そして兩眼で黒地に白の紙を見て二重像を生ぜしめる。若し兩眼で見て單像を生ぜしめるやうにすれば、依然として黒地に白であるけれども、二重像にして見ると、窓に近い像は勝色に見え、窓に遠い方は樺色に見える。此の實驗を改良したものは、一方の眼に青色の眼鏡をかけ、他方の眼に鼠色の眼鏡(所謂黒眼鏡)をかけて黒地に白を見て、二重像を生ぜしめる實驗である。一つの像は青色と見えるが、他の像は鼠色でなしに黄色を帯びて見える。此の單像對比を一眼對比と云ひ、二重像對比を兩眼對比とも稱へる。

(三)對比は其作用の分布區域の結果から、之を縁對比と面對比に分ける事もある。(1)縁對比とは、對比を與へる光又は色と、對比を受ける光又は色との相接する縁に於て起る對比で、概して對比は此の縁に於いて著しい。其例は第二十七圖

及び第二十八圖の實驗に依つて知る事が出来る。(2) 面對比は縁對比に對するもので、接觸面より離れた部分に生ずる對比である。

| | | | | | |
|---|------------------------|----|------------------------|----|------------------------------------|
| 一 | 色彩の印象 | 十一 | 色彩感覺系統の第三方面 明度 | 廿一 | 殘像の分類と記述 |
| 二 | 色彩の整理 | 十二 | 光感覺及色彩感覺の有ゆる變化を同時に示す系統 | 廿二 | 光の對比と色の對比 |
| 三 | 色彩の表出 | 十三 | 混色法 | 廿三 | 光の對比の方法 |
| 四 | 感覺としての色彩 | 十四 | 補色餘色又は反對色 | 廿四 | 色の對比の方法 |
| 五 | 郊外の或る別荘の一室 | 十五 | 中間色及び三基色 | 廿五 | 對比を與へる色と對比を受ける色 |
| 六 | 學僕—眼隱し—自動車—別荘—逆立—隣室の瞥見 | 十六 | 餘色關係に歸せしむべき多色混合 | 廿六 | 光の對比 |
| 七 | 色彩の分類と記述 | 十七 | 色彩の適應 | 廿七 | 同調色の明度對比と色の感傳 |
| 八 | 光感覺即ち白黒系の系統 | 十八 | 適應と混色との關係 | 廿八 | 色の調子の對比 |
| 九 | 色彩感覺系統の第一方面—色調 | 十九 | 所謂消極的殘像 | 廿九 | 色の飽和の對比 |
| 十 | 色彩感覺系統の第二方面—飽和 | 二十 | 所謂積極的殘像 | 三十 | 單獨對比と復合對比 |
| | | | | 卅一 | 同時對比と繼續對比 單獨對比と二重像對比 縁對比と面對比 |